

篆書体蒙文印章一顆

吉池孝一

一

古代文字資料館では篆書体モンゴル文字モンゴル語が刻された銅印を一つ所蔵している。当初この資料については満洲文字ではなかろうかと漠然と考えていたが、2007年3月、研究報告のため来校された契丹文字研究者呉英喆氏にお目にかけてところ、モンゴル語の語彙が含まれている由、モンゴル文字であることが分かった。

その後、内容を精査することもなく抛って置いたのであるが、過日サイト古代文字資料館の表紙に写真を掲載したことを機に、印文のローマ字転写を試みた。

二

印章(写真左)の基本情報は以下のとおりである。

紐 : 獣形

質 : 銅

重さ : 101.0g

大きさ : 全高 36.38mm。台厚 13.12mm。

印面 : 縦 25.50mm、横 25.53mm。

三

印影(写真右)にみえるモンゴル文字モンゴル語は、篆書体によって正方形の四つのブロックにまとめられている。

第1ブロックは左上: sedgil (心)。

第2ブロックは左下: čilen (まさに「後置詞」)<sup>1</sup>。

第3ブロックは右上: čindamani (如意宝珠 <梵語 cintā-maṇi)。

第4ブロックは右下: このブロックは更に二つに分かれる。上は -yin (の「属格語尾」)、下は tamaγa (印)。

すなわち sedgil (心) čilen (まさに) čindamani (如意宝珠) -yin

---

<sup>1</sup> Lessing, F. D. et al. 1995, p.183 による。‘CILEN [originally suffix -cila- / -cile- + n] postpos., adv. As, according to, like.’

(の) tama ya (印) とある。

この čindamani (如意宝珠) を人名とみて「思いのままに。チンダマニ(人名「如意宝珠」)の印」と読むことにする<sup>2</sup>。

#### 四

さて、印文が篆書体であることは、直接に漢字篆書体、あるいは満洲文字篆書体を介して漢字の影響を受けたものである。興味深いことに、篆書体を用いてモンゴル文字を正方形にまとめあげている。これは漢字の方形を模したものである。

モンゴル語印文の「～yin (の) tama ya (印)」は更に興味深い。この表現形式は漢語印章に常用される「～之印」を模して成立したものであろう<sup>3</sup>。漢語印の「～之印」は、古くは戦国時代官印に「工師之印」などがあり、漢代私印には「張捐之印」(張捐は姓名)などがある<sup>4</sup>。その後これは一貫して中国で使用される印章印文の表現形式の一つであり続けていることは印章関係の豊富な出版物によって知ることができる。

いっぽう、所謂漢字文化圏周辺の諸言語による印章印文の状況については、寡聞にして、関係出版物や論文の中に散見する僅かな資料により、その印文の在り様を想像しているにすぎないのであるが、当該印章を含め、モンゴル語印で『～の印』とする表現のあるものが本格的に出てくるのは清代に当たる時期以降のようである<sup>5</sup>。それで、モンゴル語印章

---

2 当初 čindamani (如意宝珠) を人名とは考えず、この語の後に属格語尾が使用されることに違和感を覚えていたが、内蒙古からの留学生ハス(ハス)さんにお聞きしたところ čindamani (如意宝珠) は人名の可能性があるとのこと、これに従うことにした。

3 私的な懇談のおり、中村雅之氏より漢語「～之印」を模した可能性はないかとの話がでた。さもありませんと、ここは中村氏のアイデアを拝借して記述した。

4 葉其峰 1997 参照。

5 13 世紀、グユク・カンからローマ教皇に宛てた国書の印璽印文にモンゴル文字で「Mongkä tngri-yin küčüntür yäkä Monggul ulus-un dalay-in kanu jrlg il bulga irgân-tur kürbäsü busirätügüi ayutugai 永遠なる天の力において大モンゴル国の大なるカンの命令が服従のそして反乱の民に届くならば敬い恐れよ」(斎藤純男 2006,p.18 による) とある。

なお、ウイグル文書のなかには、ウイグル文字やパスパ文字で qutluγ (幸運な、福德をもつ) と刻された印章を捺したものがあり、14 世紀中葉から後半にかけてチャガタイ=ウルスにおいて発行されたものであるという(松井 太 1998 参照)。このような印章も漢字文化圏周辺の印章のあり方として参考になろう。

寡聞にして明代に当たる時期の印章の有り様は知らない。清代になると、満洲語

の「～yin/un/ün/u/ü (の) tama γ a (印)」については、あるいは満洲語印章「～i/ni(の)doron(印)」を介して漢語印の影響を受けたとも考えられる。

以上を要するに、この資料にはモンゴル文字モンゴル語が刻されているわけであるが、内容としてはチベット仏教を彷彿とさせる部分があり、その表現形式は漢字漢語の影響を受けているということになる。

## 五

東アジアの文化には、中国文化という骨組みを支えとして、異なる文化が重なり合い、更にそれが複合して形成されたと見なすことができる部分がある。この篆書体蒙文印章は、そのような文化の重層性を体現した文字資料といえよう。もっとも、それぞれの専門家の目には違ったものに見えるかもしれないが、また誤解がある点についてはご教授を願うことができれば幸いである。

最後にこの印章の名称について一言しておきたい。紐は獣形（獅子であろうか）であるので、「獣紐蒙文如意宝珠印」とする。なお、製作年代は不明であるが見た目の印象を述べれば、それほど古くはなく 19 世紀に降るものの如くである。

### 〈参考文献〉

Lessing, F. D. et al. 1995. *Mongolian-English Dictionary*. Third reprinting.

Bloomington.

葉其峰 1997. 『古璽印與古璽印鑑定』北京：文物出版社。

斎藤純男 2006. 『モンゴル語史研究入門』（仮題。草稿 2006 年版）東京学芸大学。

松井 太 1998. 「ウイグル文クトルグ印文書」, 『内陸アジア言語の研究』XIII, 1-62 頁+写真 15 枚。

---

と漢語、満洲語とモンゴル語が併記された印章印文が見出される。もちろんそれぞれ単体の印文もある。その印文をみると、満洲語「～i/ni(の)doron(印)」、漢語「～之印」、モンゴル語「～yin/un/ün/u/ü (の) tama γ a (印)」とするものが少なくない。



全景



印影